

今月の谷口雅春先生のお言葉

ほめるほど子供は無限の力を発揮する

わが子には無限の潜在能力がある

人間の内には実に無限の潜在能力が埋蔵まいざうされているのである。深く穿うがつに従ってどれだけでも豊かにその潜在能力を掘り出すことが出来るのである。穿うがつとは自覚するということである。自覚しさえすれば埋蔵せる宝は常に掌しょうちゅう中のものとなるのである。だから表面にある能力だけを自分の全部だと子供に思わすな。表面にある「自分」は「真しんの自分」の唯ただの「小出こだし」にしか過すぎないことを知らせよ。「小出し」は使うのに便利かもしれ

ないが、この「小出し」を自分の全部だと思ってしまうならば大いなる発達は望めないのである。常に子供に教えて小成しょうせいに安やすんずるなといえ。小成は自分の「小出し」に過ぎないこと、今ある彼の能力はすべて「小出し」に過ぎないこと、「小出し」は決して誇るに足りないこと、つねに「小出し」に満足せず、本源すなわ、即ち無限の潜在能力こと(神)より汲くむように努力すること——常にかくの如ごとき真理を子供に解る言葉で教えるように心懸こころがければ、現在の自分に満足する子供の傲慢心ごうまんしんは打碎うちくだかれ、驕傲きょうごうは消滅せしめられ、永遠に能力の伸びる精神的基礎は築かれるのである。自分の内部の生命が無限の大生命つらなに連つて

おり、そこに自分の本当の宝が在るのだということが判るとき、いま僅かに掘り出した能力の「小出し」位に傲慢になっっていることは出来なくならざるを得ないのである。

(新編『生命の真相』第22巻159～160頁)

「本当の自分」を実現することを人生の理想に

幼き子供に対しては、「人間は神の子だ。子の顔が親の顔に似ているように、汝の能力と性質とは神の姿に肖せてつくられているのだ。神はこの世界の万物をつくられたのであって、人間は神の子として、神の無限に大きな能力のあとつぎに造られているのだ、だから神の子は神の子らしく生きねばならぬ。神から譲られている無限に大きな能力を発現しようと思わないものは、親から折角頂いた宝の庫を開かないで棄ててしまうものだ」こういう意味の話を時々言葉を変えて子供に話して聞かせることにして、人間の本性の尊いこと、その潜在能力の無限であることを子供の心に吹き込むようにすれば好い

である。すると、子供は次第に「本当の自分」が如何に崇高く靈妙なものであるかを知りはじめめる。そしてその「本当の自分」を実現することが彼の生涯の理想となり、従来の小さな虚栄や、小成に安んずる慢心や、狡利己心は消滅して、本当に彼は謙虚な心持で生長の正道を辿り得ることになるであろう。

(新編『生命の真相』第22巻161～162頁)

言葉の種子は必ず芽を出し実を結ぶ

言葉は種子を蒔く。それは必ず芽を出して実を結ぶのである。家庭から(中略)罵りの声(のし)が絶えない限りは、かかる家庭で育てられた子供が生長して造り上げた社会が善くならないのは当然の事である。種子は、遙かの幼時に蒔かれている。詳しくいえば幼児以前の胎教に於ても蒔かれている。胎教以前にその魂の前生の経験や、祖先の遺伝の種子もあるのである。因果はめぐる、だから吾々はこれらの悪い種子の力を奪ってしまうために

反対の種類の種子を蒔かなければならないのである。それは賞讃の種子である。讃嘆の種子である。如何に子供の現在の状態が賞めるに値しなくとも、「今に善くなる！」「きつと偉い人物になる！」こういうふうな漸進的進歩の暗示を与えるに相応わしくないことはないのである。そしてその暗示の力で、漸進的にその子供を良好して行くことは吾々の為し得る、否為さねばならない義務であるのだ。

（新編『生命の真相』第22巻167～168頁）

「神性」を認めれば悪は消えてなくなる

諸君の子供にそして諸君の教え子に宿つているところの「神性」（神からの大遺伝）を認めることから始めよ。そして光が暗を逐い出すように、吾々がありありと彼に宿っている「神性」をば認めさえすれば、その「認める力」の輝きによって、如何なる悪癖も悪遺伝も数年のうち根絶することは又難くはないのである。

（新編『生命の真相』第22巻170～171頁）

わが子の美点と長所をほめましよう

常に子供を鞭撻して、彼の善さを力説せよ。彼の美点を強調せよ、自分自身の有つ長所を自覚せしめよ。ここに子供を教養する極意があるのである。美点を強調し、弱点を忘却せしめ、失意に枉屈する時間を希望に躍進する時間に変化せしめよ。彼もし希望に輝き、美点にのみ躍進を続けるならば、弱点に執着し、弱点を考え、失敗を悲しんでいる暇はないのである。心を弱点に置かないとき、行いに弱点を繰返す暇がないとき、その弱点を再び繰返す傾向はうすれて来るのである。ここに彼の美点のみが發揮され、長所のみが生長する。最初は彼に接する両親や教養係がそれを賞める——やがては人類全体が、彼の長所を賞揚し、美点を讃嘆し、その貢献に拝謝する時が来るであろう。

（新編『生命の真相』第22巻174～175頁）